

宮沢賢治の「永訣の朝」をめぐる授業  
—賢治とトシとの対話を通して—

大関 健一・青柳 宏

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第8号 別刷

2021年8月31日



# 宮沢賢治の「永訣の朝」をめぐる授業<sup>†</sup>

—賢治とトシとの対話を通して—

大関 健一\*・青柳 宏\*\*

真岡市立真岡西小学校\*

宇都宮大学大学院教育学研究科\*\*

宮沢賢治（1896～1933）の妹であり、彼の最大の理解者ともいわれる妹・宮沢トシは、24歳という若さで死を迎えた。「凡ての人人に平等な無私の愛を持ちたい」という願いを抱きながら。そんなトシとの別れは、賢治のその後の作品に大きな影響を与えるものであり、賢治の思想が（他者、自然、宇宙を含む）森羅万象へと開かれていく「機縁」であったと私たち（大関・青柳,2020a）は考えている。本実践は、賢治とトシの別れの「時」である「永訣の朝」を読むことで、他者の生死にふれ、子どもたち自身が「いのちそのもの」について、また「自己の生」について感じ、想いを巡らすことを目的とした。子どもたちにとって、それは、賢治とトシという「死」を目の前にした他者との対話でもあった。本実践を通して、私たちは、授業における子どもたちとの対話、授業後における子どもたちの綴った感想文との対話を繰り返してきた。そして、そこに立ち現れてきたのは、他者の悲しみに悲しみ、他者の想いに想いを巡らし、それぞれの感受性をもって他者の生死とかかわり、自己の「生」に想いを馳せる子どもたちの姿であった。

キーワード：生と死、いのち、感受性の次元、かけがえない今、約束、時、菩薩、他者を宿す

## 1. はじめに

はじめに、宮沢賢治の「林と思想」を引用する。

こゝいらはふきの花でいつばいだ

（一九二二、六、四）

（宮沢,1979a:p.108.）

### 林と思想

そら ね ごらん

むかふに霧にぬれてゐる

蕈きのこのかたちのちひさな林があるだらう

あすこのとこへ

わたしのかんがへが

ずゐぶんはやく流れて行つて

みんな

溶け込んでゐるんだよ

宮沢賢治が「林」について綴るとき、その感受の在り方は（他者、自然、宇宙を含む）森羅万象へと広がっていく。そしてそれは、いつでも亡き妹・宮沢トシと共に在った。

1922年11月27日、宮沢賢治は「信仰を一つにする」妹・トシと別れの時を迎える。それは誰もがいつかは向き合う、避けることのできない大切な人との別れ。

これまでの「生と死」をめぐる教育、あるいは「いのち」をめぐる授業は「命はひとつ」「限りある命」というような価値や有限性をはじめ、「命のつながり」という関係性や連続性の中で、どこか「生と死」や「いのち」を対象化し、意味づけるという流れの中で実践されることが多かったのではないだろうか。しかし、はたして「生と死」や「いのち」は、そのような「認識の次元」によって捉えられればよ

<sup>†</sup> Kenichi OZEKI\* and Hiroshi AOYAGI\*\*: Lesson about Miyazawa Kenji's "Eiketsu no Asa":

Through the Dialogue with Kenji & Toshi

\* Mokanishi Elementary School of Moka

\*\* Graduate School of Education, Utsunomiya University

（連絡先：aoyagi@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

いのだろうか。

フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスは、「感受性」という、意識のはたらきや認識とは異なる次元の重要性を記している。

「始原的なものの享受から出発して記述される感受性は、思考の秩序にはぞくしていない。それは感覚の秩序にぞくしているのであって、ことばを換えれば、〈私〉のエゴイズムがそこで震撼し、触発されるありかたにぞくしているのである。感覚的な質をひとは認識するのではない。ひとはそれを生きる。この葉の緑、この夕日の赤さは、認識されるのではなく生きられるのである。」

(レヴィナス,2005;訳,p.268.)

「感受性とは理性に先だって存在するものなのである。」

(レヴィナス,2005;訳,p.275.)

また、熊野純彦は著書『レヴィナス—移ろいゆくものへの視線』の中で次のようにいう。

「一瞬ふきわたり、吹きすぎる風は、存続する実体ではない。光はふと煌いて、過ぎ去ってゆく。ひとはそれらのすべてをたんにひととき享受するだけである。そこでは同一的なものについての知、さまざまにことなつて現出するなかでおなじでありつづけることがらにかんする認識がまだ成立していない。抜けるような青さや微かな風、あえかな光は、意味づけのてまえで生きられている。」

(熊野,2017:p.213.) [強調は原著者]

子どもたちをはじめとした、私たちが「生と死」や「いのち」について学ぶとき、それらを対象化して考えることに先立ち、「世界の享受」と「生きられる」こと、意味づけのてまえ、まさに「感受性の次元」における出会いが必要なのではないだろうか。本実践は、子どもたちのもつ「感受性」の地平から歩みはじめることを目指した。「死にゆく人」、「死者」、「死者と共に在る人」の言葉、尊き「死者」への「祈り」を読む機会を通して「いのちそのもの」について、また「自己の生」について感じ、想いを巡らすことを目的とした。そこに生まれる学びが、子どもたちの「生」をよりゆたかにしてくれることを願って<sup>10</sup>。

## 2. 実践に向けた授業構想

以下は、堀尾青史の書いた「[「無声慟哭」の日]」の一部である。

「耳ごとと鳴ってさっぱり聞けなくなったんちゃい」／にわか脈がうたなくなった。／叫び声がかこえた。／母屋で人びとと向かいあっていた賢治は、質物や道具箱をつんだ渡し廊下を疾走するように走った。／トシは何かを索めるように眼を動かしていた。／いったい何をともめているのか。この末期にのぞむものは何か。／咄嗟であり寸刻である。生と死の刹那であり、劫に通じる一瞬である。／賢治は頭をだき起すとその耳もとで力いっぱい叫んだ。／南無妙法蓮華経／トシは二へん、うなずくように息をし、しずかに頭をよせかけたままになった。／「トシさん、トシさん、お父さんもお母さんもいるよ。みんないるよ。トシさん、トシさん」／賢治は叱りつけるように叫んだが、そのまま、ごうごうととらのように泣き出し、こらえかねて次の間へ逃げだし、押入れに顔をつっこんだ。」

(宮沢,1979b:p.108.)

この日、賢治は最愛の妹・トシの死と出合った。耐えることのできない悲嘆と共に。

賢治は、その後、1933年で亡くなるまでの11年間をトシの死と共に生き、多くの作品を残した。それらの作品は、賢治の思想と共にトシへの想いに満ちている。また、「永久の未完成これ完成である」(全集 第十五巻,p.17.)という賢治自身の言葉どおり、それらの作品は賢治が死を迎えるその時まで、猛烈な推敲が続けられた。そのような意味において、賢治によって綴られた作品は詩や物語という言葉には収まらない「他者の死」と共に在ろうとした賢治の心、生き方、思想が表れた「祈り」そのものであるように思える。私たちは、大関・青柳(2020a)において、「春と修羅」と「銀河鉄道の夜」を通して賢治の「祈り」にふれ、「他者の死」と共に生きる「生と死の教育」について論じている<sup>20</sup>。本実践では、そんな賢治の数多くの言葉の中から、賢治がより慈しみ深く、万象を自らに宿すようになっていった「機縁」だと思われる詩「永訣の朝」を教材として扱おうと考えた。それは、大関・青柳(2020a)の実践化ともいえる。

今回、改めて教材研究に取り組み、授業を構想す

るにあたり、私たちは、宮本久雄の著書『旅人の脱在論 自・他相生の思想と物語りの展開』から多くの示唆を得た。

「だから賢治は、先述の修羅的生、いわば生きながらの死を生きていたともいえる。その修羅的な死の淵から彼を天上志向の修羅へとひきあげ、さらに菩薩的地平に転生させる出来事や人間との出会いがあるとすれば、それは一体どのような転機であり誰であるのだろうか。われわれは、この賢治再生の鍵を妹トシ（敏）の存在に求めたいのである。」

（宮本,2011;p.178.）

私たちは、1922年11月27日、あの日の賢治とトシに出会うことで、目の前に迫りくる避けることのできない「他者の死」、その刹那的な「生」の様相にふれることができたかと考えた。それが、「生」とは「いのち」とは、という認識による捉えとは異なる「感受性の地平」において、自らの「生」を見つめ直す機会になるのではないかと考えたからである。

以上、私たちが、子どもたちと共に、賢治とトシとの対話を重ねる授業を構想するにあたり、意識した視点について簡潔に記した。私たちは、これらの視点をふまえ、「永訣の朝」を教材とした「生と死」、「いのち」をめぐる授業を実践した。

### 3. 第一回目の授業

「永訣の朝」を読む ～宮沢トシとの出会い～

今回、大関は、真岡市立真岡西小学校と真岡市立亀山小学校（以下、真岡西小、亀山小）の6年生の2学級において、それぞれに以下に示す二時間の授業を行った。

宮沢賢治の「永訣の朝」をめぐる授業  
一賢治とトシとの対話を通して一

第1時（2021年2月12日／真岡市立真岡西小学校）  
（2021年2月16日／真岡市立亀山小学校）

「永訣の朝」を読む ～宮沢トシとの出会い～

第2時（2021年2月19日／真岡市立真岡西小学校）

（2021年3月2日／真岡市立亀山小学校）

約束の「時」 ～賢治とトシとの対話～

「永訣の朝」を教材とし、計二時間の授業を構成した。（授業のタイトルについては、本稿の執筆にあたり、子どもたちの学びと感想文からまとめたものである。そのため、子どもたち自身はこれらのタイトルにはふれていないことを、はじめに記しておきたい）ここでは、まず、第1時の授業「「永訣の朝」を読む ～宮沢トシとの出会い～」についてみていきたい。

#### 3. 1. 教材「永訣の朝」について

まず、教材である宮沢賢治の詩「永訣の朝」を引用する。

永訣の朝

けふのうちに

とほくへいつてしまふたくしのいもうとよ  
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

（あめゆじゆとてちてけんじや）

うすあかくいつさう陰惨な雲から  
みぞれはびちよびちよふつてくる

（あめゆじゆとてちてけんじや）

青い蓴菜いんざんのもやうのついた  
これらふたつのかけた陶椀たうわんに

おまへがたべるあめゆきをとらうとして  
わたくしはまがつたてつばうだまのやうに  
このくらいみぞれのなかに飛びだした

（あめゆじゆとてちてけんじや）

蒼鉛さうえんいろの暗い雲から

みぞれはびちよびちよ沈んでくる

ああとし子

死ぬといふいまごろになつて

わたくしをいつしやうあかるくするために  
こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ  
わたくしもまつすぐにすすんでいくから

（あめゆじゆとてちてけんじや）

はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから

おまへはわたくしにたのんだのだ

銀河や太陽 気圏などよばれたせかいの  
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……

……ふたきれのみかげせきざいに  
みぞれはさびしくたまつてゐる  
わたくしはそのうへにあぶなくたち  
雪と水とのまつしろな<sup>に</sup>相系をたもち  
すきとほるつめたい雪にみちた  
このつややかな松のえだから  
わたくしのやさしいもうとの  
さいごのたべものをもらつていかう  
わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ  
みなれたちやわんのこの藍のもやうにも  
もうけふおまへはわかれてしまふ  
(Ora Orade Shitori egumo)  
ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ  
あああのとざされた病室の  
くらいびやうぶやかやのなかに  
やさしくあをじろく燃えてゐる  
わたくしのけなげないもうとよ  
この雪はどこをえらぼうにも  
あんまりどこもまつしろなのだ  
あんなおそろしいみだれたそらから  
このうつくしい雪がきたのだ

(うまれでくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりで

くるしまなあよにうまれてくる)

おまへがたべるこのふたわんのゆきに  
わたくしはいま<sup>ママ</sup>ころからいのる  
どうかこれが兜卒の天の食に変わつて  
やがてはおまへとみんなとに  
聖い資糧をもたらすことを  
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

(一九二二、一一、二七)

(宮沢,1979a:p.164-167,356.)

「永訣の朝」は、1924年(大正13年)4月20日、東京の関根書店から刊行された『心象スケッチ 春と修羅』に収録された作品である。1922年11月27日という妹・トシが亡くなった日付で綴られている。同じ日付の「松の針」「無声慟哭」と合わせ、それら三つの作品は「無声慟哭三部作」ともいわれる。本実践では、『新修 宮沢賢治全集 第二巻』の「永訣の朝」を基に、最後の四行のみ後記(解説)に掲載されている宮沢家所蔵本の自筆手入れを引用した。

私たちは、まず何よりも子どもたち自身が「永訣の朝」の「叫び」を聴くことが大切ではないかと考えた。まずは、子どもたちそれぞれが感じること。そこから「永訣の朝」は、それぞれの子どもの内に、それぞれの在り方で、賢治とトシを現成させてくれるのではないかと考えた。

入沢康夫は、『新修 宮沢賢治全集 第二巻』の「後記(解説)」の最後に次のように記している。

「賢治の《心象スケッチ》とは、その名称から安易に想像されるような、ある日ある時の現場のスケッチそのものではなく、また、その幾分か形を整えられたものでもないこと、出発点には現場のスケッチがあったとしても、それが以後の時間の中で変転を重ねて行く、その一つの断面としてわれわれの前にあるのだということ、この点を常に意識しつつ作品に接し、読者自身の「かけがえない今」という時点での心象風景を、一行一行と読み進むなかで、いわば作者賢治と協力する形でつむぎ出すこと、これがおそらく「真に賢治を読む」ための唯一の道筋なのだ。」(宮沢,1979:p.360.)

子ども自身の「かけがえない今」において、賢治とつむぎ出す。そのためにも、授業中、できる限り言葉や作品それ自体に対する解釈や説明はさけることとした。ただし、その上で、子どもたち自身が互いの感じたことを交わらせていくための糸口として、二つの言葉を取り上げたいと考えた。

一つは、トシの言葉として綴られている「(うまれでくるたて／こんどはこたにわりやのごとばかりで／くるしまなあよにうまれてくる)」である。

山根知子は、著書『わたしの宮沢賢治 兄と妹と「宇宙意志」』の中で、「銀河鉄道の夜」のサソリの話を用いた上で、

「そして、「どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてず、どうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかい下さい」という祈りを口にするのです。／このサソリの祈りの言葉は、トシが臨終の日に遺言のように語った「うまれでくるたて／こんどはこたにわりやのごとばかりで／くるしまなあよにうまれてくる」(「永訣の朝」という言葉に重なって聞こえてきます。賢治がサソリの祈りを描いたとき、トシのこの

声が心のなかで響いていたにちがいません。」  
(山根,2020:p.187.)

と、綴っている。「…わりゃのごとばかりで／くるしまなあよに…」という言葉で「自己の執着によって苦しまないように」と受け取ることは、トシの精神性や信仰、トシ自身の「生」、共に在った賢治の想いを感じるためには、大切なことではないかと考えた。

二つ目の言葉は、「(Ora Orade Shitori egumo)」である。「あたしはあたしでひとりいきます」とトシは言う。それは賢治との永遠の別れである。山根は、賢治の執筆した手紙の下書きを引用し、「宇宙意志」という思想について述べている。「宇宙意志」という言葉を使うかどうかは別として、賢治も、トシも、森羅万象や宇宙というような「自己を越えた大きなもの」を求めていたことは、残されたそれぞれの言葉から読み取ることができる。そんな「信仰を一つにするたつたひとりのみちづれ」が「Shitori」でいこうとする。「(Ora Orade Shitori egumo)」という言葉は、賢治にとって耐えがたい別れの言葉であっただろう。しかし同時に、この言葉があったからこそ、賢治はその後、自らの道を生きていくことができたのではないかと考える。

賢治の作品には、「銀河や太陽 気圏などによばれたせかい」というような「自己を越えた大きなもの」と共に在ろうとする面と、同時に、「個」という感覚、「Shitori」を感じる。「よだかの星」のよだか、「虔十公園林」の虔十、「銀河鉄道の夜」のジョバンニとカムパネルラ、「雨二モマケズ」におけるデクノボー、それぞれが「(Ora Orade Shitori egumo)」を実践しているように思える。それは「Shitori」で、自らの内に「修羅」を、自己に対する「執着」を抱きながらも、「自己を越えたもの」と共に在ろうとする実践者としての姿とも言えるのではないだろうか。賢治やトシの思想、「生」にふれるためには、なくてはならない言葉であると考えた。

第一回目の授業、または二時間の中で、授業の展開や子どもたちの想いにあわせて、これら二つの言葉にふれていくことで、「永訣の朝」と子どもたち、子どもたちと私たちの間に対話を生むきっかけをつくることができたかと考えた。

### 3. 2. 授業の展開

2021年2月12日3校時、真岡西小、6年2組（出席者29名）。

10:25 授業者である大関は、子どもたちに「ある二人の言葉にふれ、『いのち』について感じたり、生き方について考えたりするような授業ができたなら…」と伝え、プレゼンテーションソフトで電子黒板に宮沢賢治の写真を映し出した。



【宮沢賢治 座像／林風舎 所蔵

転載／鍋島,2007:p.5.]

「宮沢賢治」という名前を伝えると、5年生のときに、国語で学習した「注文の多い料理店」を思い出し、「知っている」とつぶやく子どもたちが何人かいた。

次に、賢治には、二歳年下の「宮沢トシ」という妹がいたことを伝えた。そして、1922年11月27日という日付で賢治が妹トシに向けて書いた「永訣の朝」という作品があることを紹介した。

黒板には、中央に「永訣の朝」と書き、その左右にそれぞれ「宮沢トシ」、「宮沢賢治」の名前を記した。



【宮沢トシ 肖像／林風舎 所蔵  
転載／鍋島,2007:p.6.】

10:30 頃、「永訣の朝」を印刷した紙を配布し、朗読を行った。朗読を終えた後、子どもたちに5分程度で簡単に感想を書いてもらった。続いて、約15分かけて（宮沢トシの生涯を中心に）賢治とトシについての説明を行った。プレゼンテーションソフトを使い、トシをめぐる出来事とトシ自身の言葉を紹介していった。

以下プレゼンテーションの内容を記す。

【プレゼンテーションの内容】

1898年（明治31年）

現在の岩手県花巻市に生まれる。  
（花巻市の場所が分かる地図や写真を示す）

1902年（明治35年）

トシ3歳、賢治5歳。  
（当時の小正月に撮影させた写真を示す）



【幼童期 肖像／林風舎 所蔵  
転載／鍋島,2007:p.6.】

1903年（明治36年）

賢治6歳、花巻川口尋常小学校に入学。

1905年（明治38年）

トシ6歳、花巻川口尋常小学校に入学。

1911年（明治44年）

トシ12歳、花巻高等女学校に進学。  
（当時のトシの写真を示す）

1914年（大正3年）

賢治、盛岡中学校（現盛岡第一高等学校）卒業。  
盛岡市岩手病院に入院。

1915年（大正4年）

賢治、盛岡高等農林学校に入学。

1915年（大正4年）

トシ、ヴァイオリンの講習を受ける。  
音楽の先生に好意を抱く。  
事情が周囲にもれ非難を受ける。



1915年 3月  
地元新聞「岩手民報」  
「音楽教師と二美人の初恋」三日間の掲載。

1915年 4月  
日本女子大学校家政学部に入學。  
その当時、トシが浄土真宗僧侶の近角常観に送った書簡の一部を引用した。

「とにかく、あらゆる心配苦勞を親にかけ、親を涙させるような事をして、三月の末、或る意味の敗北者として、故郷を離れ、のがれて参りました。」  
(岩田・碧海,2010p.128.)

1915年  
日本女子大学校創立者 成瀬仁蔵と出会う。  
成瀬校長からの課題に対し、トシが提出した答案から以下の言葉を引用した。

「如何に生きるか」この問題程、大切なものは私には無いのである。」  
(山根,2016p.28.)

1918年 (大正7年)  
12月  
日本女子大学校 4年生  
肺炎により入院。母と賢治が看病のために上京。  
賢治は翌年三月まで看病。

3月  
母と賢治、叔母に付き添われて花巻に帰郷。

1920年 (大正9年)  
トシ22歳、「自省録」を書く。  
「自省録」の中で、トシが自分自身に向けて綴った問いを引用し示した。(原文ではなく、山根による要約)

「ある特別な人と人との間に特別な親密さが生ずるとき、多くの場合、それが排他的な傾向を帯びてきやすい。(中略)彼らの求めたものは結局のところ彼らの幸福のみで、それがもしも他の人々の幸福と両立しない場合には、当然、利己的に、排他的になる性質のものではなかったか?」  
(山根,2020p.110-111.)

また、あわせて、トシが自省録を書くことを通して、「凡ての人人に平等な無私の愛を持ちたい」という願いを抱いたことを伝えた。

「彼女が凡ての人人に平等な無私な愛を持ちたい、と云ふ願ひは、たとへ、まだみすぼらしい、芽ばえたばかりのおぼつかないものであるとは云へ、偽りとは思はれない。」  
(宮本,2011p.191.)

1921年 (大正10年)  
トシ23歳。母校、花巻高等女学校に教諭心得として勤め、家事と英語を担当する。  
「当時の生徒の証言には、トシ先生が「『人のためにになりたい、郷土のために働きたい』と常に申しておられた」と記されています(『花南六十周年史』)。」  
(山根,2020p.117.)

1921年 (大正10年)  
賢治25歳。東京にいた賢治のところに、トシが病気であることが知らされる。トシが体をこわし咯血した。その後、病状は深刻化。

1922年 (大正11年) 11月27日  
「永訣の朝」にはこの日付が記されていることと、宮沢トシがこの日、享年24歳で亡くなったことを子どもたちに伝え、説明を終えた。

授業開始から約30分が経った10:55頃、子どもたちに向けて (Ora Orade Shitori egumo)、(うまれでくるたてこんどはこたにわりやのごとばかりでくるしまなあよにうまれてくる)の二つの言葉について「どういうことだと思いますか」と問うた。

そして11:00から11:10までの最後の10分間、改めて「永訣の朝」について感想を書いてもらった。

同月16日の3校時、亀山小の6年1組(出席者20名)においても同様の展開で授業を実施した。

### 3. 3. 「永訣の朝」をめぐる感想文との対話

「永訣の朝」を読み、賢治とトシに出会った子どもたちが書いた感想には、多様な想いがつまっていた。以下、子どもたちが授業の最後に書いた感想文と、それに対して授業者である大関がワークシートに綴った、子どもたちへのコメントを掲載する。そして改めて、それらの言葉と対話を重ねていきたい。

(以下、太字…子どもの感想、〈 〉…授業者からのコメント、子どもたちの感想については、すべて「原文ママ」)

まず、永遠の別れを想い、悲しみを感じた子どもたちの感想を紹介する。

#### H.Y.さんの感想

賢治さんは、トシさんのことを大切にしていたんだってことがわかりました。かなしい言葉がでていて心が痛い。(中略)この永訣の朝、読んでいだけで気持ちがたわってかなしい気持ちになります。

〈…僕自身も改めて「永訣の朝」を読んでみました。H.Y.さんの感じたことを想いながら読んでいくと、どの言葉を選んで、読んで、そこには深い深い悲しみが流れているように感じました。そう思うと、反対に「永訣の朝」の中のトシの言葉「あめゆじゆとてちてけんじや」「Ora Orade Shitori egumo」「うまれでくるたて…」がどこか賢治の悲しみによりその言葉のようにも感じられてきました。〉

#### N.R.さんの感想

妹が亡くなることが悲しいんだろうなと思った。人が亡くなることはとても悲しいんだなと思った。心の底がぞわぞわした。かなしい思いが伝わってきた。…「ああとし子」の短い文章でも、悲しいのが分かる。はなれたくない気持ちが分かる。

〈人が亡くなることは、とても悲しいんだなと思った。心の底がぞわぞわした。〉という言葉を読んで改めて「永訣の朝」の中を流れる大きな悲しみを感しました。また、自分の心の中、心の底に感じた感覚を「ぞわぞわ」と言葉で表してくれたN.R.さんの感想、すばらしいなあと思いました。僕も心の中がぎゅうっと締め付けられるような感覚になります。深い深い悲しみを感じ取ってくれたN.R.さんの感受性、感じる心に感動しました。…〉

#### I.R.さんの感想

最初はとても悲しいお話でしたが、「わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ」ってところでとてもいいお話だなんて思いました。

〈僕はI.R.さんの言葉、感じたことにふれて、今までとは違う感覚になりました。(中略)僕はこれま

で「永訣の朝」には深い悲しみを感じてきました。またそれをいやすような賢治を想うトシの姿を。ですが、I.R.さんの感想を読んで「光」を感じました。悲しみの中にある光。…〉

私(大関)は、I.R.さんの感想を読み、「永訣の朝」に対して、これまでとは異なる感覚をもった。それは「いいお話」という言葉からくる感覚である。I.R.さんの感想文に対するコメントでもふれたが、私自身には、これまで「永訣の朝」に対して「いいお話」という感じ方はなかった。ただ、I.R.さんが感想でふれた最後の言葉「わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ」は、「1.」で述べた「祈り」そのものである。これまで、私の中では、その「祈り」を感じる以上に、悲しみの感受がまさっていた。しかし、I.R.さんの心は「祈り」の尊さを、美しさを、より強く感受していたと思える。だからこそ、「いいお話」と感じたのではないだろうか。

賢治は「春と修羅 (mental sketch modified)」の中で、「おれはひとりの修羅なのだ」(宮沢,1979:p.21.)と書いた。中沢新一は、生誕百年記念「宮沢賢治の世界」展の図録において以下のように記している。

「阿修羅はもともと、まばゆい光の神だった。ほかのどの神よりも、まばゆい光、その光の神が、地上の物質の世界に封じ込められたとき、闘争する神、阿修羅に変わった。」(朝日新聞社,1995:p.42.)

I.R.さんの「いいお話」という言葉にふれたとき、「すべてのさいはひをかけ」た賢治の祈りは「よだかの星」の青い美しい光のような、解きはなれた修羅のような、光に満ちたものであるように、私には感じられた。

次に、賢治とトシの互いを想う心にふれているような感想を取り上げたい。

#### T.N.さんの感想

…心に残った文章は、「やさしくあをじろく燃えているわたくしのけなげないもうとよ」で、その理由は、トシさんが死ぬ前の1秒1秒を大切にし、けんじさんをやさしくしようとしていることが読み取れるし、けんじさんが自分の妹のトシさんのことを「やさしくあをじろく燃えているわたくしのけなげない

もうとよ」と言っていて、本当にトシさんのことを大切にしているということが分かるから。  
〈…トシが1秒1秒を大切にすることで賢治をやさしくしようとする。賢治はトシを大切に。互いが互いを大切にすることで死を前にした時が大切に刻まれていく。T.N.さんの感想を読んで僕自身もそんなことを感じました。〉

#### K.R.さんの感想

トシさんの話を聞いて、「わたくしのやさしいもうとよ」が心にグッときた。理由、おたがいの事を分かり合い、支え合っていたのかなと思ったから。過去にいやな事があっても、何かのため、と働けるのがすごいと思う。  
〈…「何かのため、と働ける」トシ。トシはすべての人々の幸福を求めたのかもしれないね。そんな想いを賢治自身も理解し、まさにK.R.さんが書いてくれたように分かり合い、支え合い生きたといえるのかも。…〉

#### Y.K.さんの感想

…「ありがとうわたくしのけなげないもうとよ」の文から、兄弟愛を感じた。  
〈…賢治は「ありがとう」と妹に対して感謝の気持ちをもっていたのかもしれないね。僕は消えてしまっていますが、Y.K.さんの書いた「敬う気持ち」という言葉が心に残りました。僕もY.K.さんと似たように感じているかもしれません。賢治はトシに対して「敬い」の想いをいっていたんじゃないかなあと。それは大切にするとか、好きとかという気持ちとはまたちょっとちがうように思います。…〉

Y.K.さんのワークシートには、「敬う気持ち」と綴られ、消された跡がはっきりと残っていた。第2時において授業者の大関は、そのことについて、Y.K.さんと直接対話をする機会をもった。Y.K.さんは「わたくしをいつしやうあかるくするために／こんなさつぱりした雪のひとわんを／おまへはわたくしにたのんだのだ／ありがとうわたくしのけなげないもうとよ」という言葉から、そう感じたと話してくれた。死を目の前にして、賢治を「いつしやうあかるくする」ことを考えているトシに対して、賢治は「敬う気持ち」をもって「ありがとう」と言ったの

だと思うと。

私たちは教材研究の段階から、トシ自身が象徴するような「神性」について話し合いを重ねていた。それは、宮本久雄が「菩薩」と表現したものでもある。  
「われわれは先にトシ自身が修羅場から「凡ての人人」への菩薩的な愛の境位に達したことを観た。その境位はまさに詩中の「うまれでくるたて……」というトシの言葉にも現前している。だから賢治がトシ菩薩に「あめゆき」を献げることは、修羅が菩薩に結ばれゆく照明の第一歩ともいえよう。」

(宮本,2011:p.196.)

賢治がトシに対して「神性」、「菩薩」というような感覚を抱いていたと、Y.K.さん自身が感じたとは言えない。また、そのようにY.K.さんの感じたことを意味付けてしまうことも飛躍しすぎている。ただし、Y.K.さんは賢治がトシに対して「敬い」の念を抱いていたのだらうということを感じ取っていた。

また、トシの生き方、トシの想いにふれた感想も見られた。

#### M.S.さんの感想

私は「永訣の朝」を読んで、宮沢賢治さんの妹（宮沢トシさん）を想う強い気持ちを感じました。宮沢トシさんは死ぬまで賢治さんを思いやり、やさしくしていたのだと思いました。そのことを賢治さんは、トシさんが亡くなる時に気づき、感謝の気持ちで胸がいっぱいになったのではないかと考えました。  
…

〈M.S.さんの「宮沢トシさんは死ぬまで賢治さんを思いやり、やさしくしていた」という言葉が心に残りました。賢治の想いだけでなく、トシの想いを感じていることに心ひかれたからだと思います。トシの（詩の中の三つの）言葉には、どこか賢治を思いやるやさしさが流れているように感じました。また、その想いに気づいた賢治の気持ちにもM.S.さんの感想は広がっていき、M.S.さんの人を想う気持ちにふれたような感覚になりました。…〉

#### I.R.さんの感想

宮沢トシさんは、人のためになんかいてもチャレン

ジした。…

〈I.R.さんのまっすぐな言葉に心ひかれました。「宮沢トシは、人のためになんかいつもチャレンジした」まさにそうだったのだと思いました。「凡ての人人のために」。そしてこの「永訣の朝」の瞬間も「Ora Orade Shitori egumo」と。また今度生まれてくる時も「わりやのごとばかりでくるしなあよに」と。トシのチャレンジは「死」を目の前にしても、その先にも続いていたのかもしれないね。〉

I.R.さんは、「永訣の朝」だけでなく、プレゼンテーションによるトシの生涯についての説明を聞いたことで、「人のためになんかいつもチャレンジした」とトシの生き方を捉えたのだと思われる。

「(Ora Orade Shitori egumo)」から感じたことを綴ったと思える「一人」という言葉を使った感想もあった。

S.K.さんの感想

命の尊さ、命の短かさや命というはかない物を大切にその心を知ることができた。賢治さんは、トシさんの言葉を聞いて、もうトシさんにはじゅうみょうが残り少ないと思いついトシさんがいなくなってもちゃんと一人で生きていってと、それが兄賢治さんにつたえたかったことなのではないだろうか。〈…「トシさんがいなくなってもちゃんと一人で生きていって」というS.K.さんが感じたこと、とてもいいなあと思いました。だからこそ、わたしは一人でいくと(Ora Orade Shitori egumo)と言ったのかもしれないね。〉

S.K.さんは、「ちゃんと一人で生きていってと、それが兄賢治さんにつたえたかったこと」と考えた。私は、S.K.さんの感想を何度も読み、改めて「トシの想い」に想いを馳せる機会を得た。私は自らの最期に、何を祈るだろうか。これまで別れた人々は何を祈ったのだろうか。そしてトシは何を祈ったのか。S.K.さんの感想を読んだことで「永訣の朝」が、賢治の祈りであると同時に、トシの祈りでもであると、これまで以上に感じられた。S.K.さんは、トシの祈りが、トシ亡き後の賢治に向けられたものであると捉えている。「一人で生きて」それは(Ora Orade Shitori egumo)「あたしはあたしでひとりいきます」

に続く言葉のようでもあり、あるいはトシの(Ora Orade Shitori egumo)という想いを賢治にも投影したかのような捉え。

詩「松の針」(「無声慟哭三部作」において、「永訣の朝」と「無声慟哭」の間に位置付けられている)の中で賢治はトシに向かって言う。

「ああけふのうちにとほくへさらうとするいもうとよ／ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか／わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ／泣いてわたくしにさう言つてくれ」(宮沢,1979a:p.169.)

S.K.さんは「松の針」を読んでいない。しかし、トシが賢治の背を押すような「一人で生きて」というS.K.さんの捉えは、「松の針」における賢治の言葉に対する応えのようにも思える。S.K.さんの感想文は、トシの想いを想像しながらも、賢治の想いまでも感じ取っているかのような印象を受ける。感想文の二文目の主語が賢治からトシへと変わっていくことから、S.K.さんは二人の想いを区別することなく包み込み、感受しているように思える。

最後に、特に本実践の第2時に大きな影響を与えた子どもたちの感想を二つ取り上げたい。

N.R.さんの感想。

私は「永訣の朝」を読んで、宮沢賢治さんから宮沢トシさんへの強い思いを感じました。ずっと一緒にいたトシさんですが、今日で、もう別れてしまうために、悲しさと感謝の気持ちを、トシさんに、伝えているんだと思いました。今日のうちに天国へではなく、「とおくへ」と言う賢治さんの心の中には、トシさんがまだ生きているということなのかなと思いました。／トシさんが(うまれてくるたてこんどはこたにわりやのごとばかりでくるしなあよにうまれてくる)と言ったとき、賢治さんとトシさんの約束ができたのだと思います。トシさんは、もうとおくに行ってしまうけど、ここでトシさんは、賢治さんに、「次 生まれてくるときには、音楽の先生に好意を持ったことでいじめのような、形になってしまったことや病気で苦しむことのないよう、自分でせいっぱい、生きていきます。」ということ、賢治さんにちかったのだと思いました。

〈ト寧に、そして熱心に感じたことをつづってくれてありがとう。／僕はN.R.さんの言葉を読んで感

動しました。まず「とおくへ」という表現について「賢治さんの心の中には、トシさんがまだ生きている」と書いてあったこと。賢治さんはトシが亡くなったあと、トシをもとめ心の旅をします。その旅はたくさん作品という形で残りました。賢治はずっとトシを感じ続けたのだと思います。N.R.さんの書いたことがあっているからということではなく、N.R.さんのそう感じる感受性に感動し心ひかれました。また、「賢治さんとトシさんの約束ができた」という言葉になるほどなあと感心しました。最後には、「ちかった」と書いてくれました。トシは命をおえるその時まで「如何に生きるか」ということに、まっすぐ向き合ったんだなあとN.R.さんの言葉から改めて感じました。／「約束」という言葉は「勺」大切なものをすくい、「糸」それを結びつけ「目印」をつけることを表すそうです。トシの言葉は賢治との間に生まれていた大切な想いを大切にすくいとりこぼれないように結びつけたのかもかもしれません。／心に温かさや苦しさを感じます。それでも、「約束」という言葉がどこか優しく、美しさを感じさせてくれて……。まとまりませんが、N.R.さんの言葉に僕自身学ばせてもらいました。すてきな感想をありがとう。)

私(大関)は、N.R.さんの感想を読み「約束」という言葉に強く心ひかれた。1922年11月27日、あの日のあの瞬間がトシの生と死の間で「雪と水とのまつしろな二相系」のように、なんとか保たれた「時」として、賢治のその後を支えるものとして、在り続けたのではないだろうか。N.R.さんの感想を読んだことで、そう思えた。そして、N.R.さんの言葉は、それをまっすぐにN.R.さん自身の感受性をもって受け止めたことの表れであるように感じられた。

M.K.さんの感想

いつもみている みなれているものでも、最後は全部が大切なものとなる。／宮沢トシさん→今度生まれてくるときは、自分のことだけでせいっぱいじゃなくて、他の相手の人にも気を配れるようにしたい。(またひとにうまれてくるときは、～)／あたしはあたしでひとりいきます。→誰かに手をかしてもらわないで、自分一人で、がんばっていきたい。／人はいつか大切な人と別れるときが必ずくる。〈丁寧に感じたことをつづってくれてありがとう。

M.K.さんの文章を読んで「最後は全部が大切なものになる」という言葉と「人はいつか大切な人と別れるときが必ずくる。」という言葉が強く心に残りました。「永訣の朝」はまさに「最後」「いつか」その時をぎゅっとぎょうしゆく(凝縮)したような詩なのだともM.K.さんの言葉から思いました。…)

M.K.さんもまた、別れのその最後の「時」を感じ取っているように思えた。それはM.K.さんが言うように「全部が大切」になる瞬間。賢治にとって、あの日、あの瞬間のことは、経過する時間と共に癒されていくものではなかったのだと思われる。

賢治は、その後の11年間という日々の中においても「永訣の朝」という「時」の中へと遡っていたのではないだろうか。それは過ぎ去っていくような時間ではなく、物理的な時間とは異なる、賢治にとっての永遠の「時」。

「永遠を時間的な永続としてではなく、無時間性と解するならば、現在に生きる者は永遠に生きるのである。」 (ワイトゲンシュタイン,2003:訳,p.146.)

トシとの別れの後、賢治は「永訣の朝」という「時」を感じながら、死者であるトシと共にあろうとしたように思える。

(繰り返しになるが、賢治がいかに死者であるトシと共に在ろうとしたかについては、大関・青柳(2020a)を参照いただきたい。)

この子どもたちの感想文との対話を通して、大関自身が感じた「永訣の朝」という「時」は、第2時の授業「賢治とトシの対話 ～約束の「時」～」へと繋がっていった。

#### 4. 第二回目の授業

「賢治とトシとの対話 ～約束の「時」～」

第1時の一週間後、2021年2月19日の3校時に真岡西小、二週間後にあたる2021年3月2日の5校時には亀山小において、第2時の実践を行った。第1時の実践後、私たちはリフレクション(授業についての振り返り・省察)を実施し、子どもたちの感想文を基に改めて教材研究に取り組んだ。以下、第2時の授業「約束の「時」～賢治とトシとの対話～」についてみていきたい。

#### 4. 1. 教材「無声慟哭」「噴火湾（ノクターン）」「子どもたちの感想文」について

第1時において、子どもたちはそれぞれ「永訣の朝」に出会い、それぞれの感受性をもって宮沢賢治とトシに出会った。しかし、中には、教材である「

永訣の朝」と心の「距離」を感じている子どもたちもいたように見受けられた。その「距離」は感想を書く際に難しそうにしている子どもたちの姿からも見て取れた。「永訣の朝」に使われる文字が旧仮名遣いであること、「死」を目の前にした作品であること、もちろん授業の展開の仕方など、いくつかの要因が考えられた。そこで第2時では、引き続き「永訣の朝」を扱うとともに、難しさを感じた子どもたちと「永訣の朝」の間を繋ぐため、子どもたち自身の感想文もあわせて教材として扱うこととした。また、より賢治とトシの想いや人間性にふれることができるよう、賢治の「ふたつのころ」が表現されている「無声慟哭」の一部、トシの自然への感受性を感じる「噴火湾（ノクターン）」の一部、賢治による自筆スケッチである「菩薩像」を取り上げることとした。

以下、教材としたそれぞれの作品と教材化を図った子どもたちの感想文についてふれたい。まず、「無声慟哭」全文を引用する。

##### 無声慟哭

こんなにみんなにみまもられながら  
おまへはまだここできるとしまなければならないか  
ああ大きな信のちからからことさらにはなれ  
また純粹やちひさな徳性のかずをうしなひ  
わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき  
おまへはじぶんにさだめられたみちを  
ひとりさびしく往かうとするか  
信仰を一つにするたつたひとりのみちづれのわたくしが  
あかるくつめたい<sup>しょうじん</sup>精進のみちからかなしくつかれてゐて  
毒草や螢光菌のくらしい野原をただよふとき  
おまへはひとりどこへ行かうとするのだ  
（おら おかないふうしてらべ）  
何といふあきらめたやうな悲痛なわらひやうをしなが  
またわたくしのどんなちひさな表情も  
けつして見遁さないやうにしなが  
おまへはけなげに母に訊くのだ

（うんにや ずるぶん立派だぢやい  
けふはほんとに立派だぢやい）

ほんたうにさうだ  
髪だつていつそうくろいし  
まるでこどもの苹果の頬だ  
どうかきれいな頬をして  
あたらしく天にうまれてくれ  
（それでもからだくさえがべ？）

（うんにや いつかう）  
ほんたうにそんなことはない  
かへつてここはなつののはらの  
ちひさな白い花の匂でいっぱいだから  
ただわたくしはそれをいま言へないのだ  
（わたくしは修羅をあるいてゐるのだから）  
わたくしのかなしさうな眼をしてゐるのは  
わたくしのふたつのころをみつめてゐるためだ  
ああそんなに  
かなしく眼をそらしてはいけない

（一九二二、一一、二七）  
（宮沢,1979p.171-173.）

宮本久雄は、次のように記している。

「つまり、修羅賢治にとってトシは菩薩的キリスト教的信の分身なのである。この分身に比し、現実の賢治はいわば死んで「徳性のかずをうしなひ……青ぐらい修羅をあるき……精進のみちからかなしくつかれてゐる」。それでもトシは「さだめられたみちを（賢治から見れば）ひとりさびしく往く」。その姿は天上的な「白い花の匂でいっぱい」な「なつのはら」にあるという。だから修羅賢治は「青ぐらい修羅」から天上の信に「再騰する」道を見ているのである。詩句「わたくしのふたつのころ」がそれを表現していよう。こうして「無声慟哭」は菩薩的分身トシによる賢治の再生において「永訣の朝」と共鳴しているといえるのではないか。」

（宮本,2011p.199.）

第2時では、「無声慟哭」から後半部分の言葉「わたくしのかなしさうな眼をしてゐるのは／わたくしのふたつのころをみつめてゐるためだ／ああそんなに／かなしく眼をそらしてはいけない」を取り上げ、「ふたつのころ」についても簡単に説明をすることで、賢治自身の葛藤にもふれようと考えた。

次に、「噴火湾（ノクターン）」の全文を引用する。

### 噴火湾（ノクターン）

わか  
稚いゑんどうの澱粉や緑金が  
どこから来てこんなに照らすのか  
（車室は軋みわたくしはつかれて睡つてゐる）  
とし子は大きく眼をあいて  
烈しい薔薇いろの火に燃されながら  
（あの七月の高い熱……）  
鳥が棲み空気の水のやうな林のことを考へてゐた  
（かながへてゐたのか  
いまかながへてゐるのか）  
車室の軋りは二正の栗鼠<sup>りす</sup>  
（ことしは勤めにそとへ出てゐないひとは  
みんなかはるがはる林へ行かう）  
しゃくどう  
赤 銅の半月刀を腰にさげて  
どこかの生意気なアラビヤ酋長が言ふ  
七月末のそのころに  
思ひ余つたやうにとし子が言つた  
（おらあど死んでもいい、はんで  
あの林の中さ行くだい  
うごいで熱は高くなつても  
あの林の中でだらほんとに死んでもいいはんで）  
鳥のやうに栗鼠のやうに  
そんなにさはやかな林を恋ひ  
（栗鼠の軋りは水車の夜明け  
大きなくるみの木のしただ）  
一千九百二十三年の  
とし子はやさしく眼をみひらいて  
透明薔薇の身熱から  
青い林をかながへてゐる  
ファゴツトの声が前方にし  
Funeral marchがあやしくいままたはじまり出す  
（車室の軋りはかなしみの二正の栗鼠）  
（栗鼠お魚たべあんすのすか）  
（二等室のガラスは霜のもやう）  
もう明けがたに遠くない  
崖の木や草も明らかに見え  
車室の軋りもいつかかすれ  
一びきのちひさなちひさな白い蛾が  
天井のあかしのあたりを這つてゐる  
（車室の軋りは天の楽音）  
噴火湾のこの黎明の水明り

室蘭通ひの汽船には  
二つの赤い灯がともしり  
東の天末は濁つた孔雀石の縞  
黒く立つものは樺の木と楊の木  
駒ヶ岳駒ヶ岳  
暗い金属の雲をかぶつて立つてゐる  
そのまつくらの雲のなかに  
とし子がかくされてゐるかもしれない  
ああ何べん理智が教へても  
私のさびしさはなほらない  
わたくしの感じないちがつた空間に  
いままでここにあつた現象がうつる  
それはあんまりさびしいことだ  
（そのさびしいものを死といふのだ）  
たとへそのちがつたきらびやかな空間で  
とし子がしづかにわらはうと  
わたくしのかなしみにいちけた感情は  
どうしてもどこかにかくされたとし子をおもふ  
（一九二三、八、一一）  
（宮沢,1979:p.223-227.）

「噴火湾（ノクターン）」からは、トシの言葉である  
「（おらあど死んでもいい、はんで／あの林の中さ行く  
だい／うごいで熱は高くなつても／あの林の中で  
だらほんとに死んでもいいはんで）」  
を取り上げることで、子どもたちがよりトシ自身の  
ゆたかな感受性にふれることができたかと考えた。

それら、賢治とトシの言葉とあわせて取り上げた  
子どもたちの感想文は（「3. 3.」と重なる部分が多いが）以下の17文である。できる限り短く、焦点  
化を図って示すこととした。

真岡西小の子どもたちの感想から。

① 分かれてしまつて、悲しい気持ちになり、まだ  
いっしょにいたいと気持ちをかんじたと思う。

I.H.さん

② 読んでいだけで気持ちがつたわってかなしい  
気持ちになります。

H.Y.さん

③ トシさんが『（あめゆじゆとてちてけんじや）』  
と言つたのか疑問に思いました。

M.S.さん

④ 他の人のために行動するのは良いことだけど、他人を重視しすぎて、自分がつらく、苦しくなることはやめてほしい。 T.Y.さん

⑤ 自分が好きだった妹をなくして悲しい。だけど自分はトシ子の分もいきていきたい。しかしまた大切な人を失いたくはないから自分一人で生きるといふ思い。 K.N.さん

⑥ トシさんは、自分の生き方に後かいしているように感じた。 S.Y.さん

⑦ トシさんがいなくなってもちゃんと一人で生きていってと、それが兄賢治さんにつたえたかったことなのではないだろうか。 S.K.さん

⑧ 最初はとても悲しいお話でしたが、『わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ』ってところでとてもいいお話だと思っていました。 I.R.さん

⑨ 人はいつか大切な人と別れるときが必ずくる。 M.K.さん

⑩ 賢治さんとトシさんの約束ができたのだと思います。 N.R.さん

亀山小学校の子どもたちの感想から。

⑪ おたがいの事を分かり合い、支え合っていたのかな。 K.R.さん

⑫ トシさんが死ぬ前の1秒1秒を大切に、けんじさんをやさしくしようとしている。 T.K.さん

⑬ 宮沢トシさんは、人のためになんかいもチャレンジした。 I.R.さん

⑭ 心に残ったところは「ありがたうわたくしのけなげないもうとよ」 S.R.さん

⑮ 敬う気持ちがあったのかな Y.K.さん

⑯ 賢治さんのトシさんへの優しい愛が伝わってきた。 T.R.さん

⑰ 人が亡くなることはとても悲しいんだなと思った。心の底がぞわぞわした。 N.R.さん

以上、17文の子どもたちの感想から、各校の子どもたちの感想を中心に、真岡西小においては15文、亀山小では12文の感想を教材として示した。

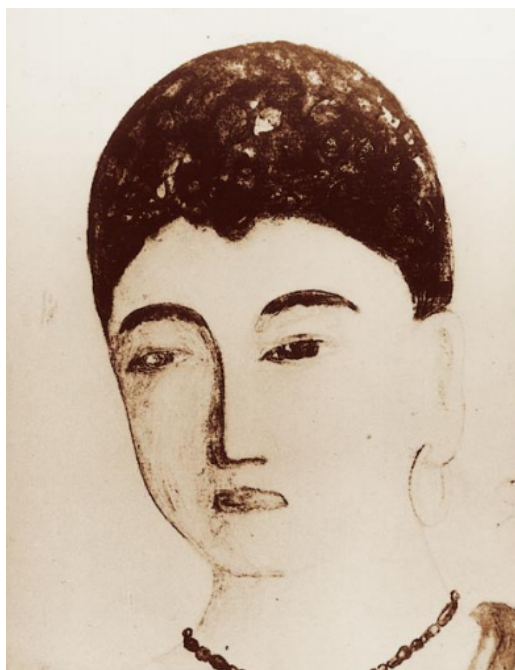
#### 4. 2. 授業の展開

2021年2月19日3校時、真岡西小6年2組（出席者31名）。2021年3月2日4校時、亀山小6年1組（出席者20名）において授業を実施した。

10:25 まず、はじめに第1時の感想文を返却した。自分の感想に対する授業者のコメントを読む子どもたち。ある程度読み終えた後、10分程度かけ、子どもたち同士で互いの感想を読み合い交流した。

10:40頃、全体で何人かの子どもたちに、心に残った感想を聞いたり、実際に感想を声に出して読んでもらったりしながら、授業者自身の想いや体験も語り伝えていった。

10:55頃、賢治の自筆スケッチである「菩薩像」を提示する。「誰を描いた絵だと思えますか」という問いに子どもたちは「トシさん」と答える。スケッチの画題が「菩薩像」であることを伝えるとともに、「菩薩」について簡単に説明した。



【自筆スケッチ「菩薩像」／林風舎 所蔵  
転載／鍋島,2007:p.7.】



「無声慟哭」と「噴火湾（ノクターン）」の一部について朗読した後、トシの死後、賢治が書いた他の作品を紹介していった。

授業最後の10分間で、二時間の授業を振り返って感想を書いてもらった。

#### 4. 3. 第二回目の授業における感想文との対話

授業後に子どもたちの感想文を集めた。子どもたちの多様でゆたかな感想との対話は、私自身にとって貴重な学びの機会となった。以下、子どもたちの感想文との対話を記す。(以下、太字…子どもの感想、〈 〉…授業者からのコメント、子どもたちの感想については、すべて「原文ママ」)

まずは、賢治とトシの言葉や友達の感想から感じたことを、率直に、または自分の経験とともに綴ってくれた子どもたちの言葉を取り上げる。

##### H.Y.さんの感想

やっぱりかなしい気持ちはしました。でもみんなの意見を見ると永訣の朝は、トシさんへの手紙だったのでは？と思いました。いつか人は死ぬ。でも死んでかなしくない人はいない。死ぬことを分かっているけど、やっぱり死んだ人が友達、家族だったらかなしいですね。やっぱりかなしい 賢治さんはトシさんのこと大切にしていたことが分かりました。よけいかなしくなってきた。

〈やっぱりかなしい気持ちはしました。〉「やっぱりかなしい」「よけいかなしくなってきた。」僕はH.Y.さんが「永訣の朝」を、賢治とトシの気持ちを、まっすぐに感じ取っているように思えて感動しました。まるで賢治やトシの気持ち、悲しみが流れ込んでいるかのような感想だなあと思いました。また、「永訣の朝は、トシさんへの手紙だったのでは？」という言葉になるほどなあと思いました。僕は、そんなH.Y.さんの言葉を読んで「手紙 四」という賢治が書いた短い物語を思い出しました。コピーをつけますので、ぜひ読んでみてくれたらうれしいです。「手紙」という言葉を読み、賢治には伝えたいこと、つづりたい想いがあったのだろうと、これまで以上により強くそう思うようになりました。H.Y.さんは、そんな賢治の心にも想いをめぐらせているようできだなあと思いました。…〉

##### S.R.さんの感想

ほくはM.K.さんの「人はいつか大切な人と別れるときが必ずくる」というのが心に残りました。その理由はほくのひいおばあちゃんがなくなった時にほくは身がひきしまるかんじがして悲しかったからです。

〈身がひきしまるかんじがして悲しかった〉大切な経験をつづってくれてありがとう。大切な人との別れは賢治とトシもそうだったように、一人一人、その人だけのかけがえのない出来事なのかもしれませんね。僕には僕の、賢治には賢治の、S.R.さんにはS.R.さんの。そのかけがえのない出来事を、心と身体で受け取りながら生きていきたいなあ、僕はS.R.さんの感想を読んでそう思いました。〉

##### W.M.さんの感想

賢治さんは、トシさんが「あおじろく燃えてゐる」とき、賢治はどんな思いで見っていたのか。私は、おじいちゃんのお兄さんが亡くなって、おそう式に行くと、顔みて、自然に泣が出てきて、顔を見るたびに、いままであったことを、思い出し、自然とあふれ出る。賢治さんは、どんな気持ちだったのか。

〈自然とあふれ出る〉とても大切な経験をつづけてくれてありがとう。「賢治はどんな思いで見っていたのか」僕はW.M.さんの言葉を読んで、改めて人との別れは、それぞれの人にとって、それぞれの、かけがえのない想いを生むものなんだと思いました。賢治の想いを言葉にすることはできない。賢治自身がなんとかつむいだ言葉が、「永訣の朝」であるから。僕たちはかけがえのない自分の経験を通して人との別れを見つめるんだとW.M.さんの感想を読んで学びました。また、「永訣の朝」という詩は、僕たちの心の中にそんな種をまく作品だと。…〉

S.R.さんやW.M.さんの感想文を読み、子どもたちはそれぞれに「他者の死」に出合っていくのだと、今さらながら感じた。かけがえのない他者との間で、それぞれ唯一の出来事として。

また、W.M.さんの感想は、自らの経験から、賢治の内面を感じ取ろうとしているようにも思えた。W.M.さんは「賢治はどんな思いで見っていたのか」と問うた後、自分の経験（親類との別れ）に想いを巡らせ、再度「賢治さんは、どんな気持ちだったのか」と問う。「他者の死」に出合う賢治の気持ちに、

寄り添おうとしているかのような問い。その間で想起されるW.M.さんの経験。W.M.さんは「自然に泣が出てきて」「自然とあふれ出る」と、「自然」という言葉を繰り返し記す。W.M.さんの綴る「自然」からは、涙がW.M.さんの意識に先立って出てくる感覚が伝わってくる。W.M.さんはそんな自分の経験と重ねることで賢治が感じていたことを感受しようとしているように思える。

次に「賢治やトシの想い」に想いをめぐらせた子どもたちの感想にふれたい。

#### M.S.さんの感想

私は「永訣の朝」の二時間の授業を通して、二つのことを考えました。一つは、賢治さんがトシさんを思いやる温かい気持ちです。トシさんが賢治さんを思いやる気持ちを読みとることもできましたが、トシさんが死ぬまで看病し続ける、賢治さんのやさしい気持ちのほうが強く感じました。もう一つは、M.K.さんの感想にあったように、「人はいつか大切な人と別れるときが必ずくる」という、大切な人と別れるときを大切にできる賢治さんに尊敬の気持ちで胸がいっぱいになりました。

〈大切な人と別れるときを大切にできる賢治さんに尊敬の気持ちで胸がいっぱいになりました。〉というM.S.さんの言葉に僕自身も胸がいっぱいになりました。「永訣の朝」以外にも、賢治の作品を読むと、賢治のトシに対する想いを感じます。それは賢治が「大切な人と別れるときを大切に」し続けたということなのだと思います。まさに「永訣の朝」には、その「別れるとき」が刻みこまれているのかもしれないね。永遠の別れである永訣という言葉。しかし、その「別れのとき」は永遠に消えることなく、永遠の「とき」として詩の内に生きているのかもしれないね。〉

#### K.R.さんの感想

この詩一つで色々な感じよう、気持ちが心の中からあふれでてきた。みんなの感想を読んで、人それぞれ考えていることがちがいで、色々な言葉に考えさせられた。だれかのために、なにかのために、と働くことは、すてきな事なんだとあらためて思った。これから先、友達と何があっても助け合い、支え合えたらいいなと思った。

〈「だれかのために、なにかのために」とても心に響く言葉だなあと感じました。賢治は「世界ぜんたい幸福」を求めました。トシは「凡ての人人」のことを想いました。そして「永訣の朝」の中においても二人は他者を想い続けたように思います。「助け合い、支え合えたら」K.R.さんの感じたこと、想いを大切に、これからの日々を大切に歩いていってくださいね。〉

#### T.I.さんの感想

…永訣の朝の「わたくしもまっすぐにすすんでいくから」という文から、わたくし「も」ということは賢次さんは、トシさんの人生がまっすぐとしたものだったということが伝わってきました。…

〈…僕はこれまで「わたくしもまっすぐにすすんでいくから」という言葉に、「Ora Orade Shitori egumo」と自分のさだめられた道（死）をいこうとするトシに対して「自分も自分のいく道をまっすぐに進む」という意味でとらえていました。しかしT.I.さんは、「も」の一文字に「まっすぐとしたトシさんの人生」を見ました。賢治のトシの生き方を見つめる目を感じ取っているかのようなT.I.さんの感想に胸が熱くなりました。…〉

#### T.E.さんの感想

…トシさんに雪をくださいとたのまれた賢治さんは、トシさんが好きだった自然から、生まれた雪の中で、いちばん良いトシさんを救ってくれるそんな雪をとってあげたかったのではないかと思います。トシさんも、賢治さんに明るく生活してほしいと、雪をたのんだことから、おたがいのことを思った兄弟だと思いました。

〈T.E.さんが「雪」から感じ取った賢治とトシ、互いの互いを想う気持ち。感想を読ませてもらい、僕も「雪」について考える機会をもらいました。賢治は「永訣の朝」の中で「雪と水とのまつしろな二相系をたもち」と書いています。「二相系」というのは二つの異なる状態、二つの相が同時に存在することをいいます。雪と水の不安定な状態、二つの相が存在するみぞれ。それは「永訣の朝」の中で、くずれることなく二相系をたもちつづけます。それはT.E.さんが書いてくれたように、まさに賢治とトシの互いの想いであり、友達が書いてくれていたように、そこに結ばれた「約束」であり、「絆」なのだ

ろうなあと思いました。…)

T.E.さんは、「永訣の朝」の中で象徴的に綴られる「雪」に想いを巡らせていた。そして「雪」を通して、T.E.さんの想いは、「救ってくれる」「明るく生活してほしい」と、賢治とトシによる相互のケアへと向かっていく。T.E.さんの言葉を借りれば、賢治はトシを「救ってくれる」雪を、トシは賢治の生活を「明るく」する雪（雪をとってくるという行為）を求めた。雪の象徴するものは物理的な意味における二相系にとどまらない。雪を介して、そこには賢治とトシによる「二相のケア」が生じている。「永訣の朝」では、表現上も、含意される想いにおいても、様々な言葉に二つの相が「かげとひかりのひとくさり」のようにたもちつづけられている。（「3.3.」でみたS.K.さんによる賢治とトシの想いの感受も、二つの相を同時に感じ取っていたと解釈すると大袈裟だろうか）「無声慟哭」における「ふたつのこころ」も、菩薩と修羅も、二相で一つの姿をたもちつづける。（それは「春と修羅」だけではなく、多くの作品、または作品間においてもいえる）

子どもたちが「永訣の朝」を読んだとき、賢治がトシを献身的に支えようとする一方向の想いのみを強く感じ取ってしまうことも考えられる。しかし、T.E.さんは、第1時から

「トシさんが思っていたことは、今度人に生まれてくるときは、周りの人に心配をかけず、逆に困っている人を助ける。ということではないかと思いました。」

と、トシの「(うまれでくるたて／こんどはこたにわりやのごとばかりで／くるしまなあよにうまれでくる)」という言葉に心を寄せていた。トシの慈しみ深い他者への想いにふれているようなT.E.さんの二時間にわたる学びだった。

「永訣の朝」を賢治とトシ、相互の想いから見つめること、そこから「永訣の朝」に描かれた「いのち」がよりゆたかに現成されるのだと、T.E.さんの感想にふれて感じた。

それは、私たちの「死」との出会いにもいえることなのかもしれない。自らの意識の外側にある「死」、他者の「死」、自らが直接経験することのできない「死」を、自己と他者がともに見つめることで、出会い、経験していく。

改めて、子どもたちが「永訣の朝」に出会うとい

うことは、賢治とトシによって、まさに「今」経験されている（されようとしている）「死」に、子どもたちが（賢治とトシと共に）出会うということなのだと思えた。そしてそれは、子どもたち自身も子どもたちの感受性をもって、その「時」に身をおく、そんな学びの機会なのではないだろうか。

第1時において友達が綴った感想から、「永訣の朝」に対する感じ方を変化させていった子どもたちも多かった。

A.M.さんの感想

…「永訣の朝」は、とても悲しい詩だと一回目は思いましたが、二回目の授業でとても賢治さんのきょうだいはとてもすばらしい人たちだと詩から分かった。

〈とても悲しい詩だと一回目は思いました〉というA.M.さんの感想を読んで、僕も同じだなと思いました。僕も「永訣の朝」には深い悲しみを感じていました。ですが、A.M.さんをはじめ、みなさんと授業をしていく中で詩から感じるものが変わりました。A.M.さんは「賢治さんのきょうだいはとてもすばらしい人たち」と書いてくれました。僕も賢治とトシ、兄妹の美しさを感じるようになりました。互いの「さいはひ（幸せ）」をかけ、互いのことを祈る二人に胸が熱くなります。…)

S.R.さんの感想

友達の意見を聞いてみて「こんな考えもあるんだ」「おもしろいな、すごいな」と思い、最初からじっくり考えてみました。大切な人が亡くなるということは、自分のことを大切にだと思っている人が、いるというのを感じることができました。

〈心に響く感想をありがとう。…大切な人が亡くなるというのは、自分にとって、大切な人が最も大切に感じられる「時」でもあり、自分のことを大切にだと思ってくれる人がいると強く感じる「時」でもあって、互いが互いを「大切」だと感じる、悲しく、苦しくも、美しい「時」なのかもしれない。「永訣の朝」はそんな賢治とトシのかけがえのない「時」が刻みこまれた詩なのかも。S.R.さんの言葉に学ばせてもらいました。〉

私は、S.R.さんの二時間にわたる学びが印象深く

心に残っている。第1時の授業において、S.R.さんが提出してくれたワークシートは白紙だった。私は、白紙のワークシートにコメントを書いた。S.R.さんが「永訣の朝」を読み、一時間にわたり自分の内対話を重ねてくれたこと、言葉にならなかった想いの価値について。

第2時、S.R.さんは「最初からじっくり考え」た。第1時において言葉にならなかった想いに遡り、もう一度「最初からじっくり」と。そして「大切な人が亡くなるということ」は「自分のことを大切にだと思っている人」がいるということだと感じ取った。賢治の心を通して観ているかのように。

本実践は、S.R.さんの白紙のワークシートに象徴されるように「沈黙」に満ちていた。私はそれを、ある意味においては、子どもたちが「永訣の朝」と出会い、賢治とトシとの対話を試みている沈黙であると捉えていた。霜山徳爾は心理療法についての話題の中で、以下のように記している。

「沈黙の豊饒性から言葉は生まれるとってよいであろう。そしてそれは対話に広さと重厚さを与えるものである。とかくあざとくになりがちな人間の日常生活での対話に、沈黙はゆるしとゆとりを与えるのである。」（霜山,2005:p.97.）〔強調は原著者〕

S.R.さんの「沈黙」は、S.R.さんが自らの内に大切な人との別れを描き出していくゆとりを与えたといえはしないだろうか。そして、S.R.さんは「永訣の朝」の中で「大切な人が亡くなる」ことに出会ったと。

最後に、「永訣の朝」の中における賢治とトシとの対話を通して、自分のこれからについて想いを巡らせた子どもたちの感想を紹介したい。

#### T.Y.さんの感想

生きていて、たくさんの人と出会ったりたくさんの人とわかれなければならない時がこれからたくさん増えるにつれて、楽しいことや悲しいこともまわっているんだなあと思った。大切な人を失うのはとても事実とはおもえなくて、受けとめきれないけど、自分の中でしっかり受け入れないといけないことなんだなあと思った。自分が生きている一瞬一瞬をどのようにつかうかによって、自分の人生の中で

悔いがあるのか満足したのかが変わるんだろうなあと思った。

〈「永訣の朝」を読んでT.Y.さんの想いが「自分が生きている一瞬一瞬」へと向かっていったこと、すてきななあと思いました。T.Y.さんの言葉にふれて僕自身は、もっと「自分が生きている一瞬一瞬」を強く感じていたいと思いました。空からふりそそぐ光も、目の前の大切な人も、鳥のさえずりも、川のせせらぎも、一瞬一瞬をどう感じるか、その一瞬に大切なものがつまっているようにも思えます。「永訣の朝」という時の中にも大切なものがつまっている。前よりも強くそう思うようになりました。〉

#### N.R.さんの感想

二時間の授業から、私の考える二人の約束も通して、命の尊さを改めて、考えることができました。賢治さんとトシさんは、最後の時間でトシさんは賢治さんに、賢治さんはトシさんにと感謝を伝え、約束をしていると思います。人は命があります。でもいつかおわりがあります。親、友達、親友、自分が思う大切な人とのわかれもあります。でも、その間、強く生き、その時間を大切にしたいと思いました。この二人、それぞれの思いは、それぞれに、強く、伝わったと私は思いました。

〈N.R.さんの感想には「命の尊さ」「最後の時間」「感謝」「約束」「大切な人」と、僕自身考えさせられる言葉がたくさんあり、多くのことを学ばせてもらいました。中でも、二時間目の感想で心に残ったのは「強く生き」「強く」という言葉でした。それはもちろんN.R.さん自身の生き方に対する想いであると思います。またあわせて「それぞれの思い」を「それぞれに」「強く」伝え合った賢治とトシの姿でもあると思います。「永訣の朝」という約束の時、二人の言葉からN.R.さんが感じ、受け取ったもの、それがはっきりとつづられているような気がします。「Ora Orade Shitori egumo」も「うまれでくるたて…」も、「わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ」も、賢治とトシの言葉には、N.R.さんが書いてくれたように、それぞれに「強さ」が感じられるように思います。（より強くそう思うようになった方がよいかもしれません）それは大切な他者への想いの「強さ」であり、自分の信じる道をゆこうとする「信」の「強さ」でもあるのかなあ、僕は思いました。すてきな感想をありがとう。N.R.さ

んが感じたことを大切に、一日一日を大切に、大切な人を想い、歩んでいってください。二時間、授業を受けてくれてありがとう。)

N.R.さんは「強く生き」と綴った。「強く生き」とは、どういうことだろうか。それは、強く想うこと、強く信じること、すべてを受け止め、乗り越え生きていくこと。そのような捉え方ももちろんあるだろう。またそのような捉えが一般的ではないかとも思う。しかし、もちろんそれだけではないだろう。

「他者の死が現実におとずれてしまう場面では、ことがらははっきりしている。死は真に外傷となる。私の応答のいっさいは手おくれで、取りもどしようがない。手のとどかない過去がけっして現在となることなく、しかし繰り返えし回帰する。他者の死はそのとき回収不能な疼きとなる。」

(熊野,2017; 訳,p.269.) [強調は原著者]

トシの「死」と出会った賢治がそうであったように、他者の死は回収不能な「疼き」として、私たちの内に生じ続ける。

「わたくしは死んだ妹の声を／林のはてのはてからきく／……それはもうさうでなくても／誰(だれ)でもおなじことなのだから／またあたらしく考へ直すこともない……」 (宮沢,1991:p.163.)

その「疼き」を内に抱き、感じながら生きること、それもまた「強く生き」という「生」の在り様といえるのではないだろうか。あるいは、それは「強さ」というよりも、他者と共に在ろうとする、(死者をも含む)他者との在り様なのかもしれない。

「貴重なものが傷つきやすいのは、ほんとうにいいことなのだ。傷つきやすいということこそ、生存していることのしるしなのだから。」

(ヴェイユ, 1995; 訳, p.180.)

「傷つきやすさ」が「疼き」を感受し、他者をつむぐ生をゆたかなものにしてくれるのかもしれない。N.R.さんの「強さ」という言葉と、賢治の多くの言葉から、私自身が生を見つめる機会を得た。

N.R.さんにとって「強く生き」とはどうか。それを明確に読み取ることはできない。しかし「強く生き」という想いが、「永訣の朝」を通じた賢治とトシとの対話の中で生まれたことに、私

は感動し、N.R.さんの学びのゆたかさにふれた気持ちになった。

子どもたちが感じたことは、まさに多様で、一人一人異なり、そこから何か共通した結論めいたものを見出すことは適切でないと考える。ただしかし、子どもたちがそれぞれに、賢治とトシの言葉をたどり「永訣の朝」という「時」を生きたことを、取り上げた感想文から感じていただけたとしたら幸いである。

少し長くなるが、矢野智司の『歓待と戦争の教育学 国民教育と世界市民の形成』から引用したい。

「国語教育の目的が、適切な用語を選択し正確な文法で文章を書いたり、あるいは人に伝達することができるようになったりすることであるなら、詩も小説も学校でことさら教える必要はないだろう。喩がそうであるように、詩の言葉は客観的な描写や正確な伝達の対極にあるものと見なされる。(中略)喩が生み出すパラドックスは、日常の言語世界の秩序を振動させ、一義的でプレーンな記号と化してしまった言葉を活性化させ、生命世界を出現させる。(中略)そしてなによりバイロジックに基づく喩によって表現される世界は、日常の言語世界以上に、より強い存在感と生命感を与えてくれる。」

(矢野,2019:p.163-164.)

二時間の授業を通して子どもたちが綴った全百枚の感想文との対話を終え、私たちは、賢治とトシとの対話を通して、子どもたちの内で「生と死」、「いのち」を感受し見つめる学びが生まれていたのではないかと考えている。子どもたちは、他者の生死とのかかわりの中で自己の「生」についても想いを馳せた。「3. 1.」において引用した入沢の言葉のように、それは「永訣の朝」として綴られた賢治とトシの言葉と、子どもたちの「かけがえない今」とがつむぎ出した生命世界における学びと考えるのだが、どうだろうか。

最後に私(大関)は、6年生全員に次のような手紙を書いた。卒業式の前日、2021年3月18日、担任の先生方から子どもたちに対し、コメントを添えた第二回目の授業のワークシートと手紙を配布していただき、本実践を終えた。

卒業生の皆さんへ

先日は、ありがとうございます。一緒に授業ができたこと、とても嬉しく、大切な思い出になりました。

僕は、これまで何度も「永訣の朝」を読んできました。そしてそのたびに、時に涙し、時に耐えきれないほどの深い悲しみを感じてきました。今回、授業をさせていただけることになり、これまで大切に読んできた「永訣の朝」を、皆さんと一緒に読んでみたいと思い、教材として選びました。これから新たな一歩を踏み出していく皆さんにとって、死というものも含めた僕たちの「生」、「いのち」について感じ学ぶ機会になったらと考えました。

授業を終えた後、皆さんの感想文を何度も読み返しました。「永訣の朝」、賢治とトシ、友達、自分自身と向き合って、自分の感じたことを言葉にしてくれていることに感動するとともに、皆さんの言葉から僕自身、多くのことを学びました。

ある友達が「自分が生きている一瞬一瞬」という言葉をつづってくれました。また別の友達は、まっすぐに「命を大切にしたい」と書いてくれました。僕たちを含む、目の前の世界は「いのち」に満ちています。自分も、友達も、先生も、大切な人も、林も、風も、雪も、水も、「銀河や太陽 気圏などとよばれたせかい」にいたるまで。今この瞬間も、この時も。ただ、そのかけがえのない、満ちた「いのち」を、時に僕たちは何気ない日常の中で感じられなくなっているのではないのでしょうか。「生きている一瞬一瞬」に満ちた「いのち」を感じることは皆さんの日々をよりゆたかにしてくれるのではないかと思います。

今回の授業で、皆さん一人一人が感じたことを大切にしてください。あなたが宮沢賢治と、宮沢トシと、「永訣の朝」を通して対話したことを。

「…わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまい、あなたのすきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。」

宮沢賢治「注文の多い料理店 序」より

皆さんの「かけがえのない今」が、「いのち」の実感に満ちたゆたかなものでありますよう、心から願っております。

令和三年三月十八日  
大関 健一

5. おわりにかえて：時の開かれと他者との出会い

授業を終えて、そして子どもたちの感想文を繰り返し読みながら、私たちは改めて、賢治とトシの「かけがえのない時」である「永訣の朝」と出合った。以下、おわりにかえて、子どもたちの言葉から学び考えたことを記したい。

5. 1. 再び、子どもたちの「感想」をめぐる

私（青柳）は、二回にわたった「永訣の朝」をめぐる授業を参観して、授業者である大関と子どもたちの間に、本当の対話が生まれていたことに何より感動した。本論中の〈授業者からのコメント〉を見れば分かるように、大関はまず第一回目の授業において一人一人の子どもたちが書いた「感想」にコメントを記し、第二回目の授業の最初に返却している。だから、子どもたち一人一人は、その大関のコメントを読んだ上で再び詩に向き合い、その上で再び、（大関にむけて）二度目の「感想」を記していた。

授業は、教師と複数の子どもたちで育まれる。しかし、その核に、教師一人と子ども一人だけの間の親密な「対話」が育まれることが、全体としての授業をよりゆたかなものにしていくことを感じさせられた。

上のことをまずふまえた上で、この「おわりにかえて」では、（本論中にはあまり触れることが出来なかった）子どもたちの記した「感想」について、私（青柳）なりに感じたことを記しておきたい。

まず、真岡西小のN.K.さんが記した感想にとってもはっとさせられた。N.K.さんは最後の授業（二回目の授業の最後の感想）で次のように綴っている。

賢治さんは、妹がなくなっても詩をかきつづけてきて、妹のためにがんばってきたことが感じられました。（中略）なぜ賢治さんはトシさんが死んでも詩をかきつづけたのかが不思議です。

なぜ、賢治は、トシが亡くなくても、詩を書き続けたのか。このN.K.さんの問いには胸を突かれた。確かに、最愛の妹が亡くなった後で、詩を書き続けることが出来るのだろうか。もちろん、（本論中のみ）N.R.さんが記していたように、まさに賢治とトシの間には（トシの死に際して）「約束」が生まれたと思われる。その「約束」によって、賢治は詩を書き続けたと考えることはもちろん出来る。しか

し、それでも、「なぜ賢治は、トシが亡くなっても、詩を書き続けたのか」と、私はN.K.さんのように考えてしまう。あるいは、賢治にとって、「詩を書く」ということは、最愛の人の喪失に苦しむ「自己」をこえて、いわば無心になって自己を開くところみとしてあったのだろうか。

しかしまた、私には、「無心になって…」というよりも、真岡西小のK.Y.さんの次の感想の方がしっくりくる。

賢治さんはトシさんが亡くなってもトシさんのことが頭からはなれなくて賢治さんの作品にトシさんのかけがついていると思う。

なぜ、賢治はトシが亡くなっても、書き続けたのか、というN.K.さんの問いに対して、K.Y.さんの言葉を借りて、「トシさんのことが頭からはなれなくて」書き続けた、と答えてもよいように思う。そして、そこには「トシさんのかけがついている」と。

K.Y.さんの「トシさんのかけがついている」という言葉は、実はとても慰めにみちていると言えるのではないだろうか。難しい言い回しになってしまうが、最愛の他者の死に際して、「私」の生は二重化されるということ。あるいは、言い換えれば、他者を宿しながら生きる、ということ。

もちろん、Ora Orade Shitori egumo に象徴されるように、トシにも、賢治にも、「一人」として生きる、という姿勢が感じられる。しかしまた、同時に、他者を宿して生きる、ということ。今回の授業を通して、私は、子どもたちの感想をたよりに、人の生の在り方に改めて心をひらくことが出来たと感じている。

ところでまた、私は、次の真岡西小のY.M.さんの感想にも胸を打たれた。

宮沢賢治さんはすごく宮沢トシ（妹）さんの思いが強く、妹が苦しんでいる姿を見て心をとぎし、みんなと一緒に天国でちやわんに入った雪を食べようと言う意味だと感じられた。

Y.M.さんの感想を読んで、私も、やはり賢治は妹が苦しんでいる姿を見て心をとぎしたのだろうかと思えて感じた。「永訣の朝」を読むと、誤解をおそれずに言えば、賢治は妹のために祈りながら、どこ

かで虚勢を張っているようにも感じられる。賢治は、詩の最後に「どうかこれが兜卒の天の食に変わって／やがてはおまへとみんなとに／聖い資糧をもたらすことを／わたくしのさいはひをかけてねがふ」と記している。これを読むと、賢治は、自分をつきはなして（自己を犠牲にして）、妹と他者のために祈っている。しかし、上にみたY.M.さんの感想は、それを「誤読」して、「みんなと一緒に天国でちやわんに入った雪を食べよう」と解釈している。この「みんな」の中に、Y.M.さんは賢治のことも入れていると思われる。それは、賢治が心をとぎしていることが、あまりにY.M.さんに悲しく感じられたからだろう。そして、トシが願った（祈った）ことは、まさにY.M.さんのように、賢治も一緒に「雪を食べよう」ということだったと思われる。Y.M.さんは、トシの側から「永訣の朝」を読むことで、本当は賢治自身も願っていた「祈り」を読み解いていると思うのだがどうだろうか。

## 5. 2. ハイデガーの「時間」とレヴィナスの「時間」

ところで、生と死をめぐる教育（授業）の一つの理論的背景として、哲学者 M.ハイデガー（1889～1976）の思想が引き合いに出されることが少なくない。主著『存在と時間』で、ハイデガーは、死をはっきりと意識することによってこそ、私たち一人一人は、一人一人の固有の可能性を理解し、それまでのしがらみを捨てて、それぞれの固有の可能性を自由に追求できる、と語っている（第1部・第2編・第1章）。

ハイデガーのいう「死」とは、他者の死ではなく自己の死である。ハイデガーによるならば、自己の死を想えば、生きている内に、しがらみを振り捨てて、本当に自分がやりたいこと、本当の自己実現を追求する可能性に開かれる、ということだろう。そして、「時間」という視点からみれば、人が自己の死にかかわる中で、時間は熟していくということ。

しかし、先に本論で引いたフランスの哲学者レヴィナスは、その著書の一つ『時間と他者』の中で、「時間」とは「他者」との係わりの中で開かれるものであると捉えている。だから、レヴィナスから見れば、ハイデガー的な「時間」は、エゴイズムに貫かれた時間、ということになるだろう。自己が自己の可能性を実現していく「時間」、それはエゴイズムに貫かれた時間ではないかと。あるいは、レヴィ

ナスによるならば、エゴイズムに貫かれた時間とは、時間ではない。時間は他者との係わりの中ではじめて開かれるということ。レヴィナスは、次のようにいう。

「未来との関係、現在における未来の現前は、やはり他人との向かい合いのなかで実現するように思われる。向かい合いの状況は、時間の実現そのものである、というわけだ。現在による未来に対する侵蝕は、単独の主体の所業ではなくて、間主観的〔相互主観的〕関係なのである。時間の条件は、人間同士の関係のうちにはない歴史のうちには存在するのだ。」

(レヴィナス, 1986; 訳, p.73.)

また、レヴィナスは次のようにも記している。「それ故、苦悩によって自らの孤独の痙攣に、そして、死との関係に到達した存在だけが、他者との関係が可能となるような場身を置くことになるのである。」

(レヴィナス, 1986; 訳, p.66.)

すぐ上の引用の、特に「死との関係に到達した存在だけが、他者との関係が可能となる」という言葉に注目したい。ここでいう「死との関係」について、レヴィナスは、それが他者の死か自己の死かという区別をしていない。それに従えば、私たち一人一人は、自己の死であれ、他者の死であれ、「死」というものに本当に向き合うことができはじめて、他者との関係が可能になる、ということである。端的に言えば、「死」に向き合ってはじめて、他者の他者性が迫ってくる、ということ。だから、これに即せば、「永訣の朝」は、賢治にとって、トシの「死」に（また、トシの死を介して自己の死に）向き合うことで、今まで捉えられなかったトシの他者性が迫ってきたことを記しているのではないだろうか。（あめゆじゆとてちてけんじゃ）、Ora Orade Shitori egumo、（うまれでくるたて／こんどはこたにわりゃのごとばかりで…）には、それまで、賢治にも捉えられなかったトシの他者性が記されている、そう捉えるべきではないか。

レヴィナスの、死に向き合うことで他者との関係が可能となる、という思想は、ハイデガーと対照的である。ハイデガーは、人間を「共同存在」として捉えている。即ち、一人一人の自我も他我と切り離せない共同の存在であるということ。そして、そのような「共同存在」である自我が、（自己の）死に向き合うことではじめて、自己の固有の可能性を目指すことができると。他の誰でもないこの「私」が

生きている「意味」は何なのか。他人の言うことに振り回されず、この世界の中で、本当に感じ、考えるという「時間」の中で生まれてくる自己固有の可能性。だから、「時間」という視点からみれば、ハイデガーの時間は、自己が本当の自己になる時間。しかし、レヴィナスからすれば、それは「時間」ではない。本当の時間は、「死」に向き合い、そこではじめて他者と出会うことで開かれてくるもの。

ところで、ここで、ハイデガーとレヴィナスの、どちらの時間の捉えが正しいかということ論じたいわけではない。ハイデガー的な時間、レヴィナス的な時間、私たちはどちらの時間も生きているのではないだろうか。そして、詩「永訣の朝」には、まさに、どちらの「時間」も存在しているように思われる。

詩を書くことは、他者の死さへも、自己の時間に同化してしまうエゴイスティックな行為になることもあると思われる。しかし、「永訣の朝」は、そうなりかけながらも、それに抵抗している詩ではないだろうか。（あめゆじゆとてちてけんじゃ）、Ora Orade Shitori egumo、（うまれでくるたて／こんどはこたにわりゃのごとばかりで…）というトシの言葉は、賢治と読者を、自己に貫かれた時間から他者との係わりの中で開かれる時間へと連れもどす。

### 5. 3. 子どもたちの感受性と共に

最後に、亀山小のN.S.さんが、トシの言葉（うまれでくるたて／こんどはこたにわりゃのごとばかりで／くるしまなあよにうまれてくる）の「解釈」として記した言葉を引きたい。

自分のことばかりで苦しまずに、誰かのことでも苦しみたい。

N.S.さんは、トシの言葉から、トシの本当の願いを汲み取っているように思われる。「誰かのことでも苦しみたい」という「解釈」は、エゴイズムをこえる人間性の可能性であり、N.S.さんが「永訣の朝」を介して、トシという他者に出合った証しだろう。そして、何より、私自身は、N.S.さんの「解釈」に出合っはじめて、トシに出会うことができたと感じている。

レヴィナスは、後期の主著『存在の彼方へ』の中で、人の「心のあり方」とは、「自らの皮膚の内に



あるかのように、自らの皮膚の内に他者を宿すこと」と捉えている(レヴィナス, 1999; 訳, p.266.)。ここで、レヴィナスが言っているのは、自己と他者の癒合ではない。先にみたように、「死」に向き合ってはじめて、他者の他者性が迫ってくる。そのような他者性を宿すということ。レヴィナスには、人の主体性とは他者性を繰り返して入れていくことではじめて成り立つ、という思想があると思われる。癒合ではなく、他者を宿すこと。言い換えれば、死に向き合い、他者と出会うことで(他者の死をこえて)時が開かれ、他者を宿すこと。それは、とても厳しい思想だが、同時にそれはなぐさめに満ちているとも感じる。

ところで、具体的に、他者を宿すとはどういうことか。それは例えば、他者の感受性を宿すということではないだろうか。雪が食べたいというトシの感受性を宿すこと。あるいは、「あの林の中でだらほんとに死んでもいいはんて」というトシの感受性を宿すこと。レヴィナスによれば、他者を宿すことは、そのまま他者に対する責任をもつことでもある。即ち、人の主体性が他者を繰り返して成立する、というのは人の主体性が本質的に他者への責任としてあるということ。そして、私たちは、このレヴィナスの思想をふまえて、賢治においては、他者への責任が森羅万象への責任にひろがっていくことを論じた(青柳, 2018a; 大関・青柳, 2020a)。だから、こう想像してみることもできる。賢治は、トシの「林」への感受性を宿すことで、「虔十公園林」を書いたのではないかと。なぜなら、「虔十」が象徴しているのは、林の中でこそ息づく体と、まさに亀山小のNS.さんがいう「自分のことばかりで苦しまずに、誰かのことで苦しまない。」という祈りだからだと。

以上、授業が終えられて今、レヴィナスとハイデガーの思想を介しながら、子どもたちの「解釈」をたよりにして、私たちはやっと「永訣の朝」に出会うことができたと感じている。そしてまた今、改めて感じているのは、やはり授業は、子どもたちの感受性と共に育まれていくということ。

## 注

1. 私たちは、これまで、詩、言葉、「いのち」、「生と死の教育」について考察を重ね、また、授業実践をこころみてきた。その記録として(青柳, 2017; 青柳, 2018a; 青柳, 2018b; 青柳, 2019; 大関・

青柳, 2019a; 大関・青柳, 2019b; 大関・青柳, 2020b)を是非、参照いただきたい。

2. 大関・青柳(2020a)は、「心象スケッチ 春と修羅」から「春と修羅 第二集、第三集」、「銀河鉄道の夜」にわたる賢治の「死者であるトシ」との在り方を読み解くことをこころみた。そして、レヴィナスの「自己の皮膚の内側にあるかのように、自己の皮膚の内側に他者を宿す」という視界から、宮沢賢治と妹・トシの「他者の死」と共にあるケア、またそこから森羅万象の内側で死者と共にあることへのひろがりについて論じている。是非、参照いただければと思う。

## 引用文献

- 青柳宏(2017). ことばを育むために(その二):M.ハイデガーの言語論の視界から. (『宇都宮大学教育学部紀要』第67号 第1部)
- 青柳宏(2018a). 「生と死の教育」を問いなおす: 宮沢賢治とエマニュエル・レヴィナスの視界から. (『宇都宮大学教育学部紀要』第68号 第1部)
- 青柳宏(2018b). 「ともだち」をめぐる道徳授業の対話的展開: 詩から対話へ、対話から詩へ. (『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第5号)
- 青柳宏(2019). ことばを育むために(その三):エマニュエル・レヴィナスの言語論の視界から. (『宇都宮大学教育学部紀要』第69号 第1部)
- 朝日新聞社文化企画局東京企画部(1995). 生誕百年記念「宮沢賢治の世界」展図録. 朝日新聞社
- ハイデガー, M(2013). 存在と時間(三). 岩波文庫〔原著初版は1927年〕
- 岩田文昭・碧海寿広(2010). 宮沢賢治と近角常観—宮沢一族書簡の翻刻と解題. (『大阪教育大学紀要』第I部門 第59巻 第1号)
- 熊野純彦(2017). レヴィナス—移ろいゆくものへの視線. 岩波書店
- レヴィナス, E(1986). 時間と他者. 法政大学出版局〔原著初版は1948年〕
- レヴィナス, E(1999). 存在の彼方へ. 講談社学術文庫〔原著初版は1974年〕
- レヴィナス, E(2005). 全体性と無限(上). 岩波文庫〔原著初版は1961年〕
- 宮本久雄(2011). 旅人の脱在論 自・他相生の思想と物語りの展開. 創文社

- 宮沢賢治 (1979a). 新修 宮沢賢治全集 第二巻. 筑摩書房
- 宮沢賢治 (1979b). 新修 宮沢賢治全集 別巻. 筑摩書房
- 宮沢賢治 (1991). 新編 宮沢賢治詩集 天沢退二郎編. 新潮社
- 鍋島直樹 (2007). 宮沢賢治の銀河世界—みんなのほんとうのさいわいをさがしに—. 龍谷大学人間・科学・宗教・オープン・リサーチ・センター
- 大関健一・青柳宏 (2019a). 「命」をめぐる授業：宮沢賢治との対話を通して. (『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第6号)
- 大関健一・青柳宏 (2019b). 「与え」をめぐる授業：贈与の哲学と間主観的アプローチを基に. (『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第6号)
- 大関健一・青柳宏 (2020a). 「他者の死」と共に生きる「生と死の教育」：宮沢賢治の「春と修羅」「銀河鉄道の夜」をめぐる. (『宇都宮大学教育学部紀要』第70号 第1部)
- 大関健一・青柳宏 (2020b). 他者の生命にふれる「生と死の教育」—矢沢宰との対話を通して. (『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第6号)
- 霜山徳爾 (2005). 共に生き、共に苦しむ 私の「夜と霧」. 河出書房新社
- 山根知子 (2016). 宮澤賢治に影響を与えた妹トシの信仰：「絶対者」を求めて. (『ノートルダム清心女子大学紀要』第40巻 第1号)
- 山根知子 (2020). わたしの宮沢賢治 兄と妹と「宇宙意志」. ソレイユ出版

私にとって学び多き「かけがえない時」でした。先生方と子どもたちに、心より感謝申し上げます。「ゆたかな」学びの機会を、ありがとうございます。

令和3年4月1日 受理

\*冒頭に記したように、今回、授業者である私（大関）は、真岡市立真岡西小学校と真岡市立亀山小学校において実践をさせていただきました。本実践、計四時間の授業の実施について御快諾くださった、真岡市立真岡西小学校校長・大越武先生、真岡市立亀山小学校校長・池田範夫先生をはじめ、実践について御理解いただき、快く御協力くださった担任である門口大稀先生、亀倉和晃先生には大変お世話になりました。また、卒業を間近に控えた時期にもかかわらず、「永訣の朝」と向き合い、自分の想いを綴ってくれた子どもたち。子どもたちと共に、賢治とトシと向き合った日々は、



**Lesson about Miyazawa Kenji's "Eiketsu no Asa"  
: Through the Dialogue with Kenji & Toshi**

**Kenichi OZEKI and Hiroshi AOYAGI**